

海外派遣プログラム報告書

I 概要

- ① 氏名：笹山脩平
- ② 派遣先：UNCITRAL（ウィーン・ニューヨーク）
- ③ 派遣期間（ウィーン）：6月11日から6月24日
- ④ 派遣期間（ニューヨーク）：6月24日から7月16日

II 業務内容

・ウィーンでの業務内容

- 6月14日：メンターとの挨拶。図書室の司書から事務所内の説明を受ける。
- 6月18日：メンターから事務所の構成員の紹介を受ける。UNCITRALが過去に発行したガイドライン等の書類を読む。
- 6月19日：SecretariatとUNCITRALを中心とした国際機関における国際的法整備のあり方について議論する。関連書籍及び論文をもらい、それらを読む。
- 6月20日：Secretariatと投資家-国家間の投資仲裁の問題について議論する。数人のSecretariat及びプログラムマネージャーと会食。
- 6月21日：プログラムマネージャーと会食。
- 6月22日：ニューヨークでのGround Pass発行のための手続きを行う。UN職員のパーティーに参加。

・ニューヨークでの業務内容

UNCITRAL Commissionに出席・傍聴。主に各国・各機関の代表と交流した。複数の代表と会食する機会を得たほか、タイ・フィリピン・ハンガリー・香港の国際調停機関・ニューヨーク国際仲裁機関の代表とは特に親しく交流することができ、それぞれの国へ訪問して再会することを約束した。また、NY Convention60周年パーティーでは、他の機関でインターンをしている同世代の仲間とも知り合うことができた。Commissionにおける議題には未知の問題もあったが、適宜勉強して内容を理解するように努めた。

III レポート

当初、派遣先では仕事や課題を与えられてインターン生のような扱いを受けることを想定していたが、実際は Visiting Scholar という肩書き通りの扱いを受け、先方からは基本的に何ら指示がなかったため、はじめのうちは戸惑った。しかし、そのように放置されることで自由に動くことができるようになり、結果としてはより大きな学びが得られたように思う。

私は、積極的に行動して人脈を広げ、さらにそれらを維持する能力を特に磨きたいと思っている。そこで、今回の派遣ではできる限り多くの人に話しかけ、今後も続くような関係性を築くことを一番の目標とした。ウィーン滞在中は UNCITRAL の職員たちが極めて多忙だったこともあり、それほど多くの人と話すことはできなかった。しかし、交流することのできた相手の一人は、他人を知人にするに大変優れており、街中や職場で誰にでも気軽に話しかけ、ごく短い時間で一緒に飲みに行く仲になるという才能をもっていた。そこで、ニューヨークに移動してからは彼のやり方に学び、会議の合間の休憩時間や、参加したパーティーの場で各国・各機関の代表に積極的に話しかけ、少なくとも顔と名前を記憶してもらえるように、可能であれば食事を共にできるように努力した。その結果、タイ・フィリピン・ハンガリー・香港調停センター・ニューヨーク国際仲裁センターの代表とは特に親しく交流することができ、近い将来にそれぞれの国に訪問する約束をした。彼らとの交流においては、今回のような機会がなければ話しかけることさえ難しい立場の人々と知り合えたことを最大限に生かすために、UNCITRAL における議論の内容にとどまらず、政治や経済、歴史や思想など、多岐にわたる議論をした。各人のバックグラウンドや年齢などによって意見が大きく異なる点と概ね一致する点があったが、なかでも仕事に対する熱意と学ぶことに対するあくなき欲求は全員に共通しており、ひとかどの人物になるための普遍的な条件の一部を垣間見たように感じた。

また、UNCITRAL で過ごす中で、言語能力に関しても非常に大きな刺激を受けた。UNCITRAL 派遣時点で私が話せたのは日本語・英語と一定程度のスペイン語だったが、UN 職員や各代表は英語能力において遥かに優れているのみならず、第二・第三外国語でも当たり前のように政治や法律の難解な議論をしていたため、そのほとんどが理解できず非常に悔しい思いをした。日本では英語が多少扱えるだけで持て囃されるような印象を受けるが、真剣に国際的な舞台で働こうと思うのであればそこに甘んじてはならないと改めて強く感じた。もちろん、特に欧米系の言語を母語とする場合、欧米系の第二・第三外国語の習得が比較的容易であるといわれるが、実際には欧米以外の国の代表もそれほど変わらない能力を身につけているという印象を受けたし、いずれにせよ欧米の人々とも仕事をするのであれば習得の難易度はあまり意味をもつものではないように思う。ここでの経験から、語学を学ぶことに対する意欲が非常に高まり、まずはウィーン滞在中に本格的に勉強し始めたドイツ語を身につけるべく、本レポートの執筆時点ではウィーンの語学学校で学んでいる。

UNCITRAL では、何か特定の業務に従事したわけではなかったということもあり、ある一つの分野について深く学ぶということはさほど叶わなかった。一方で、Commission での議

論を傍聴する中で、全く未知の分野について多少の理解を得ることができた。議論そのものは文脈や問題意識を当然の前提として行われていたため、その場では自分で簡易に調べる程度が限界であったが、後に発言者本人や他の代表に質問したり、場合によっては議論したりする中で、少なくとも問題の所在や意見対立の構造等については大まかに理解することができたように思う。また、既にある程度の知識を有していた分野についても、テキストで学ぶだけではわからない、政治的な思惑や現在に至るまでの様々な経緯についてまで知ることができた。

私は、まずは実務家として国際仲裁に関わり、ゆくゆくは国際的な制度枠組みづくりにも携わりたいと考えているため、国際商取引の枠組みを作っている UNCITRAL での実務を知ることができたこと自体も大きな収穫であった。UNCITRAL では Working Group と Commission が仕事の棲み分けをしており、Commission においては仔細な背景事情や文言に関する議論というよりも明白な不整合や不備の修正が主に行われていたが、国際機関における枠組みづくりの言語的な困難の一端を感じるすることができた。今回の Commission では英語のほかにフランス語及びスペイン語での発言が多く、後半はアラビア語や中国語の発言もあった。しかし、当該言語による発言の長さに比して英語通訳が明らかに短かすぎるということも多々あり、発言の細かいニュアンスや正確な意図がどこまで伝わっているのか大いに疑問に感じた。また、英語での発言には場合によって非常に強い訛りが伴われ、わかりにくいこともあった。実際に、ある国の代表が長々と意見を述べた後、結局賛成なのか反対なのかということすら伝わっておらずに議長が問い質すという場面や、数時間にわたり議論が行われた結果、実は意見の対立がほとんどなかったことが明らかになるという場面すらあった。もっとも、このような問題は多数の利害関係国が関わる場面では不可避であるように思われ、より緻密な議論が求められる Working Group ではその問題をどのように乗り越えているのか興味が湧いた。

ニューヨークでの滞在中は、UNCITRAL の Commission の他にもいくつかの会議に参加する機会を得た。それらの多くは「持続可能な開発 (Sustainable Development)」に関わるものであったが、今までほとんど知らなかった分野であっただけに、非常に興味深く感じた。これらの会議においても、UNCITRAL Commission で議論されるような問題に言及されることが少なからずあったが、これらの会議と Commission の場で行なわれる議論の内容・方向性は異なる場合も大いにあり、多角的な視点が得られたように思う。会議の中で最も印象深かったのは、Smart Sustainable Cities (SSC) に関する議論である。この会議では多数の登壇者がパネルディスカッションを行なったが、都市にはそれぞれの歴史・文化・気象条件などがあり千差万別なのであって、一口にスマート・シティと言っても目指すべきものが一つというわけではない、ということが繰り返し強調されていたのが印象深かった。

今回の経験は、今後弁護士として働き始めるにあたって非常に有意義なものとなったように思う。法科大学院では学生の価値観やバックグラウンドの多様性に限界があったため、法学について非常に興味深く緻密な学びを得ることができた一方で、強い自覚を持たなければ視野が狭まるおそれがあるように感じたこともあった。しかし、今回、国連という真に多様な人々の集まる場で時間を過ごしたことを通じ、法的問題についてはもちろんのこと、

具体的な社会課題や人生観についてまで、今まで自分に全くなかったような考え方や視点に触れることができた。また、同じヨーロッパ地域でも、国によって考え方や立場が大いに異なることもとても興味深く感じた。日本での学びにおいては、アメリカとヨーロッパ、そしてアジアという視点で大まかな理解をすることが少なくないように思うが、実際にはもっと複雑な問題があるのだということを肌で感じられたのは、得難い経験であったように思う。

